

覚悟の息子褒めてやりたい

鎮魂を歩く

13

岩手県山田町船越半島



加藤譲さん(30)の父、昭仁さん(68)は、力を込めて息子の生涯を私に語った。

わんぱくな子だった。いとこの影響で小学2年で始めたレスリングに、とにかくのめり込んだ。

小学4年のときに北日本選手権大会で優勝。中学まで全国クラスの大会で上位入賞を重ねた。

県内外からスポーツ特待生の誘いを受けたが、自宅から通える宮古商業高校に進学。1年秋の新人戦で優勝した。しばしば口にした「オリンピック出場」は、現実味のある目標になり始めていた。しかしヘルニアを発症し、翌年受けた手術のかわいなく、レスリングの道を諦める。



昨秋完成したばかりの新居に、加藤譲さんの遺影が飾られていた

「目標を失い、ふらふらした時期もあった。でもそこからまた、やつはがんばったんだ」

卒業後、仙台の福祉専門学校に進み、町内の介護老人保健施設に就職する。2年勤めて別の専門学校に通い、理学療法士の資格を取った。リハビリ担当としてお年寄りにかわいがられた。2008年に同僚の美和子さん(32)と結婚。

昨年は主任に昇格し、秋には実家の近くに新居を構えた。

「人間の尊厳ってなんだ？ そんなことをよく言ってた。おれはよく分からないなりに、命の平等さじゃないか、って言ったんだ」

あの日。

譲さんは、入所者らを避難させていた。施設裏の高台にいったん着いたが、再び建物に戻ったのだという。高齢女性の車いすを押しながら、もろとも津波に流される姿が、目撃された最後だった。

残された家族3人に、最後の行動をどう思うか、と尋ねた。

妻の美和子さんは「自分だけ助かるようにするようになっちゃなかったから」と言って泣いた。母、サダさん(62)は無言だった。自分が助かることも考えてほしかったですか、と重ねて尋ねると、「うん、うん」とうなずいた。

「母親ってのはそういうもんだ」と昭仁さんは言った。そしてこう続けた。

「助からないかもって、覚悟してたとおれは思う。だから、悔やむよりも褒めてやりたい」

(松川敦志)